

UNNキャンパス原稿書式

農福連携の可能性を考える

NPO法人うつくしまNPOネットワーク

理事 鈴木 隆将

▼農福連携という言葉がある。農林水産省のWebページでは次のように説明されている。「障害者等の農業分野での活躍を通じて、自信や生きがいを創出し、社会参画を促す取組であり、農林水産省では、厚生労働省と連携して、「農業・農村における課題」、「福祉（障害者等）における課題」、双方の課題解決と利益（メリット）があるWin-Winの取組を推進する。」

▼農福連携では、「福の広がり」として障がい者に加えて、ひきこもり経験者やグレーゾーンと言われる就労困難者も対象となっている。私は日頃、郡山にある、ニートひきこもり経験者の社会参加・就労支援団体である認定NPO法人キャリア・デザイナーズの役員を務めている。当法人の利用者である若者たちも他の複数の福祉事業所の利用者とともに、農業者のお手伝いに入り、夏はピーマン、秋冬はカブ・ニンジン、スポットでワイン用ブドウやシイタケなど、年間を通じて何らかの農作業を行っている。

▼農作業に参加することで、利用者にも良い影響が出ている。例えば、体を動かし作業をすることで生活リズムの改善や体力がつく。また、今、作業をしている農作物が、今後、人々の食卓に上ることを知り、社会とのつながりを感じられる。同時に、自己の社会での役割を実感し、自信にもつながっている。基本、職員を含めて3～4人のチームで活動するため、他者とどのように協力して作業を進めるか就労に向けて必要なことを実際に学ぶ場でもある。参加者からは、「農家の方が収穫までに大変手間をかけていることがわかった」「淡々と作業に没頭できた」「大変だが充実感を持てる」といった感想も寄せられている。

▼農福連携を進めていく上で、直接、または側面的に、応援やサポートをしてくれる方々の存在は欠かせない。例えば、当法人のシニアボランティアで農作業に関心のある方を中心に結成された「サイ活倶楽部」の皆さんがそうである。「サイ」には、野菜の「菜」、最高の「最」、再生の「再」などの意味が込められている。土日祝日など福祉事業所が休みになるときなどに農作業に参加しサポートしていただいている。農作業自体の楽しみはもちろん、社会貢献の一環として、また、作業後の気の置けない交流のひとつを楽しみに参加しているようだ。

▼今後の展開として、農福連携による農作物の六次化を進めていくなども考えている。郡山市では農福商工連携も推進している。農業分野や福祉分野に加え、それ以外の多様な個人や団体もつながることで、地域活性化やコミュニティ形成の軸の一つになる可能性も秘めていると感じる。（2023年12月1日記）